明治大学木寺元ゼミ FW レポート

はじめに

9 月 12 日、「くまだまさしのすみキャンライフ！」の撮影に参加させていただきました。
目的は、100 年という節目を迎えた関東大震災をテーマに、震災の歴史とこれからの防災について考えることです。すみだ郷土文化資料館に解説いただきながら、資料館から東京スカイツリーを目指して歩きました。各所での学びを、以下にまとめます。

1. すみだ郷土資料館

(1)概要

・館内に展示されていた地図では、墨田区内の多くの場所が「予想震度の高い地域」とされていた。
・関東大震災では、特に本所区の被害が大きかったと学んだ。当時の白黒写真を見ると、一面に広がる焼け野原。視界を遮るものなど何もない。被害の大きさに、言葉を失った。
・大地震や火災旋風など、目にしたこともない中での避難活動は困難を極めた。
そして、混乱のまま持ち込んだ家財道具は、火災旋風の火種となってしまった。

(2)感想

・震災後のすみだの街は、今では考えられない姿で衝撃的だった。
同時に多くの人が復興のために協力し合ったのだと感じた。
・大地震下における避難活動は困難を極める。
基礎となる心構えや準備があった上で、臨機応変な対応が求められる。

2. 俳人、富田木歩終焉の地　標柱

(1)概要

・俳人、木歩は足が不自由だった。
歩きたい一心で自ら作った「木の足」(義足のようなもの)が、俳名の由来である。
・関東大震災では、俳句の友人・声風がおぶって避難するも、火の手から逃れるには隅田川を渡るしかなかった。
・声風は木歩に別れを告げ、川を渡った。歩けない木歩はそのまま犠牲となった。

(2)感想

・ここでは、一人称の視点から、それも身体障がい者という配慮が必要な方の視点に吸い寄せながら、災害を見ることができた。

3. 牛嶋神社

(1)概要

・東京スカイツリーをきれいに眺められる鳥居には「帝都復興完成記念」と刻まれていた。

・震災後、神社の場所は少しだけ移動している。

・ちょうど 5 年に一度の大祭の準備が進められており、境内に止まっていた牛車の存在感は大きかった。

(2)感想

・牛嶋神社は本所地区の総鎮守。境内の空気を吸って、すみだの過去、現在、そして未来を見守り続ける存在だと改めて感じた。

4. 大震災遭難者追悼の碑

(1)概要

・行き交う人間の背丈よりも遥かに大きい。

・この場所 横川橋畔は、本所地区において被害の大きかった場所の一つであり、第二の被服敞と呼称された。

(2)感想

・この石碑は後世に同時代人にとって忘れがたき震災の爪痕を伝承するとともに、震災復興を願う周辺住民の思いを今に伝えているのだと感じた。

5. 東京スカイツリー

(1)概要

・整備された街並みを上から見ると地区ごとに様子が違うことに気づく。例えば、関東大震災以降に道が整備された区間があったり、一軒家が未だに点在するエリアがあったりする。

6. フィールドワークのまとめ

墨田区が震災によって受けた傷跡は、あまりに深く想定を大きく超えるものだった。それでも当時の人々は力を合わせ、場所によっては街ごとつくり変えるまでの対策を打ち、復興を成し遂げた。

我々、一人ひとりにできることには限りがあるけれど、まずは身近なところから、できる対策を進めていきたい。